

# 晩年の司馬江漢

——『春波樓筆記』を中心に——

田川邦子

(一)

かつて司馬江漢に関心を抱く人々を困惑させた問題に、その年齢欺称が惹き起す伝記上の混乱があつた。

文化五年六二歳になつた江漢は、どういふわけかこの年の正月から突如七一歳と、九年増しの年齢を記し始める。以後七十二歳で没するまでの十一年間、徹底して九年増しで押し通すので、その辺の事情がはつきりしないうちは、後世その事蹟を探ろうとする研究者や好事家たちは大いに惑わされたのである。現在巢鴨慈眼寺にある墓石には「文政元寅天十月廿一日桃言院快詠寿延居士」とあり、死没が文政元年であることは確かであるが、その年齢は記してない。文化四年以前の年齢を基準にすれば死没は七十二歳、晩年の十一年間に自称した年齢をもとに計算すれば八一歳死亡説が正しいことになるが、死没の年齢が定まらないとなれば、逆算で得られる生年にもまた二説が生じるわけで、皆大いに困つたのである。

現在この問題に惑わされる人はもういないだろう。作品や著書に書き残した年齢を具に調べれば、文化四年と五年の間に断絶があり、彼が文化五年正月（未見であるがこの年の正月に作つた年齢入りの大小曆があるという）を期して、九年加算した年齢を自称し始めたことが

はつきりしてきたからである。さすれば戒名の「寿延居士」の意もまたよく通るわけだ。

しかし事実がはつきり見えて来ると同時にまた新たな疑問も生じるわけで、いつたい何故このようなことをしたかという謎が生まれる。誰もが若く見せたい現代人には、九歳も上まわる年齢を偽称するなどはおよそ不可解だろう。だが高齢者が尊敬された江戸時代でもこのような例は全くないとはいえないが、やはり稀であるから奇行といふ他はない。

晩年の江漢にはこの年齢欺称に加えて、文化一〇年六七歳の八月「七十六（九年増しである）翁 司馬無言辞世語」なる自画像入りの引き札を、知人に配るといふことがあつた。つまり自己の死亡通知書である。それは「江漢先生老衰して画を需る者ありと雖不<sub>レ</sub>描 諸侯召<sub>レ</sub>ども不<sub>レ</sub>往 蘭学天文或ハ奇器を巧む事も倦み 菴老荘の如きを樂しみ 去年吉野の花を見 夫よりして京に溜る事一年 今春東都に帰り 頃日上方さして出られしに相州鎌倉圓覚寺 撰禅師の弟子となり遂に大悟して後病て死にけり（以下略）」というふうなもので、これを見て本当に江漢が死んだと信じる者も少なくなかつたという。また「退隱書畫会 引札」というのもあり、「今茲年已耳順 氣力稍衰」えたので業を門人に譲り閑居するつもりなので、柳橋万八楼で記念の宴を張り、需めに応じて書畫を呈上したい旨を触れている。文化三年耳順（六〇

歳)の年である。実際に退隱書畫会が催されたのは翌文化四年であったようだが、この会を済ませ、明るる年文化五年には例の年齢欺称が始まるわけである。

これらはすべて一連の行為と考えられる。つまり六〇歳を迎えた江漢は、ひたすら現実から遁れることを考えるようになっていた。耳順(六〇歳)を期してというところに、自分の年齢に対して敏感な江漢の資質が浮かび上がり、「氣力稍衰」えという肉体的自覚もその底にはあったと思われる。しかし退隱閑居して無為な余生を送るというにはほど遠い晩年で、しばしば旅行をこころみ(これらの旅行には江戸脱出の意図が窺える)、『地転儀略図解』『刻白爾天文図解』(文化五年)、『地理譚』(文化一三年)など、天地理学関係の著述にとり組んでいる。また『春波樓筆記』(文化八年)をはじめ『独笑妄言』(文化七年)、『無言道人筆記』『訓蒙図解集』(文化一一年)などの文化的著述は殆どこの時期に集中しているし、なかでも注目したいのは文化一二年の『西遊日記』である。

天明八年四二歳の江漢は四月に江戸を発ち、翌年寛政元年四月までのおよそ一年間を旅中に過した。この旅は彼の生涯でも記念的旅行で、目的はもちろん長崎にあったが、各地で文人名士と交流しては絵筆を執り、のぞき眼鏡の銅版浮絵で農民や遊女を驚かせるなど、まことに自由闊達な道中をしている。この旅行の見聞を絵入りでまとめたのが『西遊旅譚』(五冊)で寛政二年・六年と版を重ねるが、同六年には駿府の「久能山之図」とその記事が將軍家の事に触れるとして発禁になった。例の京伝の手鎖の事件などもあり、寛政年間はとりわけ出版統制の厳しい時期であったのだ。享和三年にはこれらを除き、同じ版を使って絵のみをまとめ『画図西遊譚』(二冊)を出版することはあった。しかし晩年六九歳の江漢はこれら旅行記を手もとに残る詳しい日記をもとに、再度書き直すのに執念をもやしている。もちろんこの際

上梓刊行は問題外であった。こうして『西遊旅譚』よりはるかに内容の詳しい『西遊日記』が、今日われわれの手もとに残されることになるとのだが、当時の庶民の生活、道中の風俗風景、特に長崎での行動、出島の光景などを克明に再現して貴重な資料となっている。

退隱宣言をしてからの毎日が、来る日も来る日も著述に明け暮れたとはいえないにしても、「兎角後世へのこす事のみを楽しみにいたし申候外に楽しむ事なし」(文化十二年三月廿二日附 山領主馬宛書簡<sup>①</sup>)というのには絵の事ばかりではなさそうだ。文を書くという営為にもまた業のように深くとりつかれているところがあり、著述の筆は最後まで擱くことがない。

司馬江漢の美術史上の功績が、銅版画の創始にあることを知らない人はない。彼もこの点に関しては大きな自負があり「銅版画眼鏡引札」(天明四年)には、「司馬江漢先生ハ日本銅版ノ創ナリ」とか、「後人工者ハ江漢先生ヲ祖ト知ル可シ」など書かせ、天明七年の「三圃之景」(本間美術館)には、「天明丁未冬十月 日本銅板創製 司馬江漢先刻」(「三圃之景」は同じ図柄で天明三年の作があり、日本銅版画史上最初の作品とされている)の款を書く<sup>②</sup>。ところが白河侯の御用職人亜欧堂田善が遙かに精度の高い銅版鑲刻の技術をもって登場して来たことで、創始者江漢の役割はあつてなく終りを告げたのもまた周知の事実である。江漢と田善の関係には謎の部分が多いが、その背後には白河侯松平定信の姿が見え隠れする<sup>④</sup>。

江漢の退隱とそれに続く年齢欺称偽死という一連の韜晦行為には、時代の変化という運命的なものが確かにつきまといっている。彼の青春は田沼時代とともにあつたといつてよい。明和天明期は産業商業学問芸術のあらゆる分野が活況を呈した時代で、ヨーロッパの近代科学に関心を抱く先進的知識人が数多く現われる。これら蘭学者のグループと江漢はとりわけ深い繋がりを持っており、というより彼もまた蘭学

者グループの一員であり、銅版画の創始もこのグループの力が生み出した成果の一つであった。

この時期銅版画が諸人の注目を集めたのは、事物を写し取るのに木版より遙かに迫真性があり、正確細密であるということだった。地図、人体解剖図、その他の学芸技術書の解説をより正確に徹底させるには、挿絵は欠く事ができない。長崎から輸入される西洋の学術書が、この点で大きな刺激であったと思われる。

西画は、只能造化の意をとるのみ、和漢の画は、翫物にして用を為す。(中略)文字と用を同ふする事、文字を以て誌すと雖、其形状に至りては、画に非ざれば之を弁しがたし。故に彼国の書籍は、画図を以て説き知らせるもの多し。豈和漢の画の如く、酒辺の一興、翫弄戲技をなすの比ならんや。(『西洋画談』)

と実用を契機に絵画にも写真(当時では〈写真〉)の必要性が認識され、その方法を追及し、成果を普及するには銅版画の技術習得は必須であると考えられたのだ。

江漢の銅版画創始が大槻玄沢との共同作業であったとは、江漢自ら「阿蘭書ボイスと云人の著す書中」に、銅刻を作れるの技巧の方式あり。向我玄沢大槻氏と謀りて之を訳し、天明癸卯歳竟に此製作を考へ、日本始めて草創するものなり(『西洋画談』)というから間違はない。

「阿蘭書ボイスと云人の著す書」つまりボイスの『ウォールデンブック』が、銅版画創始の手引書として万全であるか否かについては、諸家の研究があるので詳細はそちらに譲りたいが、美術史専門家や腐触銅版画(エッチング)作者たちの見解によれば〈否〉の答えが出されている。この本では記述が簡単すぎて実作の手引きにはならないとい

うのである。江漢や玄沢が頼りにしたのはボイスの著書と並んで当時貴重書であった、フランス人ノエル・シヨメール著すところの『ウォールデンブック』の蘭訳書であったということになるようだ。これは文化八年から幕府が翻訳にかかり、結局未完に終って刊行もされなかった七巻の大冊本で、現在静岡県立図書館蔵文庫にある『厚生新篇』のことである。

江漢がなぜシヨメールの本について言及しなかったかについては謎とされる。幕府当局へ遠慮したのか、それとも白河侯定信がいうように、彼の秘密主義なのか。想像を逞しくすればさまざま考えられるが、秘密主義といっても種本を秘すという単純なものではないだろう。蘭学界の中心人物大槻玄沢が現に健在なのだから、秘密にしても始まらないことだ。脇道に逸れるので今はこの事に深入りできないが、先端的な技術を囲む思惑やかけ引きは、いつの時代にも複雑で謎の部分が多い。幕府が秘匿独占したかったシヨメール本を、江漢が閲覧利用したこと、或はそのやりかたのなかに問題があったのではないか。それに出来あがった制作品(銅版浮絵)を、公開利用する江漢の態度が無邪気すぎた。自己宣伝めいたものを感じさせ、人々の反感を買う原因になったとも考えられる。

未知の世界の未知の技術。その習得には適当な指導者を求めることから始めるのが今も昔も常識であるが、文献のみが頼りというのが鎖国時代第一の悪条件で、まず言葉の障害を乗り越えるのにひと苦労しなければならぬ。一人の人間の才能に全てを委ねることは不可能で、衆知を集めての討論研鑽が何より大きな武器であったことは、蘭学事始(杉田玄白)がよく物語っている。江漢が後に玄沢と不仲になり蘭学者から孤立していった根本には、時代の変化があるが、それと共にこの共同作業のなかに何か対立の萌芽が隠されていたのではなからうかと思われる。

蘭学の興隆に先覚的役割を果たした平賀源内は江漢より十八才年長であるが、源内の豊かな個性と多方面の才能、その行動力が発散する魅力は、若い江漢には大きな刺激であつた筈だ。『春波楼筆記』にも源内についての記述はかなり詳しい

源内は皆て金銀銅鉄の山にあるは、山頂に立と云ふ。如<sup>レ</sup>岩如<sup>レ</sup>石物現る。之を見るの術あり。我等も是にも加はりしに、甚しき間違ひ見損ひある事にて、後悔し止みぬ（『春波楼筆記』）

と晩年の江漢は回想するが、これは彼が若い時代源内の近くにいたことを物語る。彼が源内の鉾山探索に同行したのは安永二年の秩父鉾山の件ではないかと思われるが、このとき江漢は二七歳であつた。だが二人の出会い、更にさかのぼり、おそらく江漢の画の師南蘋流の画家宋紫石を介してのものと思われる。彼の自伝「江漢後悔記」（『春波楼筆記』）は年月を追うよりも、項目別の大まかな回想という筆運びだが、絵はまず狩野派に学び、「然るに和画は俗なりと思ひ、宋紫石に学ぶ」とあり、浮世絵師鈴木春信没後、その人の名で贋作を描いて版行した事をその後が続ける。鈴木春信の急死は明和七年（江漢二四歳）、従つて宋紫石の門に入ったのはそれより以前と思われる。南蘋流は大胆華麗な色彩と構図を、細部の写実がしつかり支える風の当時の新画風で、その流行は長崎から始まり京都から江戸にも及んで、宋紫石は江戸ではその中心にいた人物である。この流派の唐絵が後に西洋画への橋渡しになつたことはあまりにも有名だ。この宋紫石が平賀源内とも交わりがあつたのは『物類品鑑』（宝暦一三年）に挿絵を描いていることでも分る。いずれにせよ江漢二十代の前半は、宋紫石、平賀源内、また大小絵暦の会にも関連して鈴木春信（江戸錦絵の創始者）など、彼の周辺には明和安永期の江戸文化形成に参加した多彩な顔触

れがいて、自由な文化活動を展開し、これが彼の人間形成に少なからず影響を与えたことは間違いない。

(二)

『春波楼筆記』を通して晩年の江漢の内面を窺おうとして、前置きが長くなつた。

幼年期は別として、二十歳以後の江漢の生涯はだいたい四つの時期に分けられる。第一は先に述べた青春期の修業時代から春信名で浮世絵の贋作をし、さらに春重と名前を変えて浮世絵や肉筆美人画を描く時期である。大槻玄沢らとともに前野良沢に入門するのもこの頃かと思われる（『蘭学階梯』）。銅版画を創始する三七歳から長崎旅行を終える頃までが第二の時期で、江漢の自由闊達な活躍ぶりは『西遊日記』に余すところがない。寛政の改革の始まるのもこの期であるが、田沼時代に培われた自由の気風はまだ残り、蘭学者たちとの交流にもあまり問題はなかつたはずである。

江漢の生涯でもつとも分り難く、かつ問題の多いのが第三の時期で、彼が蘭学者のグループから次第に離れ孤立していく時期である。寛政五、六年頃に、彼をグループから隔てる何か起きたと想像されなくもないが、現在の資料では実情はつかみにくい。寛政五年ロシア漂流から帰還した大黒屋光太夫を吹上御苑に呼び、將軍の御前で事情を聞くということがあつた。光太夫と桂川甫周との質疑応答を甫周自身が筆記したのが『漂民御覽記』で、これは海外事情に関心を持つ人々に早くから回し読みされたらしい。これに対する江漢の批判をさらに批判した「盲蛇」（寛政六年 筆者鳥有道人）という文章が、大槻玄沢の『畹港漫録』にあるのを、岡田千曳氏が紹介されている<sup>6)</sup>。かなり痛烈な感情むき出しの筆であるが、ここに引用されている江漢の甫周批判

にもまた異常なところがある。おそらく何も無いところから、突然このような応酬が交わされるとは考えられないようなものである。

江漢の桂川甫周批判には、烏有道人が難ずるように確かにピントのずれがある。だがそれで江漢の学識が劣るとするのもフェアではないだろう。吹上御苑などには参入の資格もない庶民江漢は、後に光太夫と会い直接話を聞く機会を持ったらしい。もちろん内容は彼が関心を抱くロシアの地理や国内事情である。だが光太夫から充分納得のいく説明を得られなかったについては事情があつた。「盲蛇」の筆者自身がいのように、光太夫が「見知らぬ人に対して外国の談に及ぶべからざる由の命を奉じ」ていたので、「かれ（江漢）がやうすもはかりがたく、みだりに物語らざるも理りなり」で、光太夫のような外国生活経験者に幕府は緘口令を出していたのだ。江漢のような庶民学者には、すでに情報が十分に届かない時代が来ていたのである。

ロシアについてのものもとの知識を問えば、当時は桂川甫周と江漢にさして違はないはずだが、異なるのは二人の社会的政治的立場である。新たな情報をめぐり、少ししか知らされない人間が多くを知っている者を批判すれば、「盲蛇」になるのも止むを得ない。

同じ寛政四五年頃の事として、松平定信は次のように書いている。

寛政四五のころより紅毛の書を集む。蛮国は理にくはし。天文地理又は兵器あるは内外科の治療、ことに益も少なからず。されどもあるは好奇之媒となり、またはあしき事などいひ出す。さらば禁ずべしとすれど、禁ずれば猶やむべからず。況やまた益もあり。さらばその書籍など、心なきものの手には多く渡り侍らぬやうにはすべきなり。上庫にをき侍るもしかるべし。されどよむものもなければ只蟲のすと成るべし。わがかたへかひをけば世にもちらず、御用あるときも忽ち辨ずべしと、長崎奉行へ談じて、舶来之蛮書かひ侍るこ

とは成りにけり（『宇下人言』）

ここには為政者松平定信の悩みとジレンマ、それを解決するのに辿り着いた彼の結論がよく出ている。時あたかも林子平が『海国平談』などで処罰された時期である。定信の眼に江漢がはたして「あしき事などいひ出す」「心なきもの」と映っていたかどうかは分らない。しかし江漢が生得身につけている芸術家的な自由思想は、創造活動の範囲の中に納まれば許容できるにしても、ひと度現実批判へ向かえば「あしき事などいひ出す」ことになりかねない。そういう意味では幕府にとって江漢のような芸術家は得体の分らない危険人物であつた。

およそ十年後の文化二年（一八〇五年）ロシア船が肥前長崎に来航し、日本にもいよいよ国際社会の波が押し寄せて来る。この時正式に通商を求めるロシアに対する幕府の対策について、江漢は怒りをもつて次のように記す。

魯西亞の使者を、半年長崎に留め上陸をも免さず、其の上彼等が意に戻り、且其の返答甚失敬不遜、魯西亞は北方の辺地不毛の土にして、下国なりと雖も、大国にして属国も亦多し。一概に夷狄のふるまい非礼ならずや、レサノットは彼の国の使者なり、王は吾国の王と異ならんや。夫礼は人道教示の肇とす。之を譬へば位官正しきに裸になりて立つが如し。必や吾国の人を彼等禽獸の如く思ふなるべし。嗚呼慨哉。（『春波樓筆記』）

幕府の外交政策についての彼の批判は、全く手厳しい。もつとも『春波樓筆記』は出版しないことを前提にしているから、これだけ書けたともいえる。

(三)

『春波樓筆記』の「一休ばなし」のなかに「活物は水で包んで火で動く薪を喰ふて腹は竈(イキモノ)」の一首があり、「文化八年末三月二十八日」の日付を入れている。これは巻頭に近く、巻末には「文化八年辛未十月日誌之」の記があるから、約七箇月で書き上げたものと思われる。江漢六十五歳の年である。

長短さまざまな文章二一四は、自伝「江漢後悔記」「一休ばなし」「貧福の論」「人間感」「懶斎筆記の抜書及評論」のように、テーマ別に統合されるものと、まったく恣意的に書き継がれていったものとは分かれる。その部分は宇宙論・自然論・人間観・仏書論・三教(儒・仏・老荘)論・文章論・大名・狐の怪・小野篁・天愚孔平、『つれづれ草』『近世畸人伝』の抜き書き風のものなど、雑多な内容で、あまりまとまりがよいとはいえない。しかし思い浮かぶままに書き継いだ所感の中に、たひたび現われる繰り返し、それも表現の異なる繰り返しが多くなり、それらの重なるのなかに、江漢の宇宙観人間観が非常に明快に見えてくるところがある。

『春波樓筆記』のなかでとりわけ印象的なのは、彼が天と水について考察し、思索を傾けるところである。たとえば

天地の中、水の傾きあり、今日本水于減する時なり、今垂墨利加の水高し、土地減ず。故に日本の地開けたる事、甚近し、故に人智も浅し、欧羅巴の地開闢も久し、又人智も深し。

これは地球全図などによる所感かもしれない。次に「西洋天地開闢」

では創世記のアダムとイヴについては、「是吾国の云ふ天神地神の時を云ふなり」とあるが、特にノアの洪水に言及しているのが注目される。洪水で人類悉く滅亡しノア一族のみ助かるのを第二の天地開闢と捉え、それを地球の上の「水の傾き」の説に敷衍結合する。「欧羅巴を以て開闢の始とす」とするのは、西洋文明の先進性を知悉した江漢の現実認識から来ているが、また同時に「水」を媒介とする世界感覚がそれを支える。この世界感覚は観念的瞑想的なものでなく、画家江漢が自然に向かつて立つとき、彼の視覚が捉えた世界の真相なのである。水がとりわけ重要なのは、高所から自然を俯瞰する彼の視線に圧倒的量で迫るものだからだ。そういう意味では文化八年九月に十国峠に登り、四方を眺望するところは感動的でさえある。ここでも、「十国五島山々連りて海に入る、予考へ見るに実に水の減りたる状、山々の皺にあり、富士のみ出現したる山なり(後略)」で、度々くり返す「水の傾きの論」であるが、彼と共に大自然の中に立たされ、共にその視線で見ること促されるような力を感じる。

この水に対して払われる特別のまなざしと独特の考察はどこから生じるのか

注目されるのは蘭学の分野のなかで江漢がとりわけ関心を持ったのは、天文学地理学であったことだ。西洋から齎られる世界地図が当時の人々に与えた驚きと感銘が異常なものであったことは想像に難くないが、銅版鑲刻の技術に習熟した江漢が、銅版世界地図の製作を思い立ったのは当然の成り行きであった。そのきっかけとなるのはあの記念すべき長崎旅行で、この旅行にはすでに世界地図を携行しているが、長崎で大海を渡来して来た和蘭陀船に乗る機会を得て船の巨大さに驚くと共に、航海術に必須の天文学に眼を見開らかされたともいえる。

地図上の「世界」が改めて実感と感銘を以って、彼の目前に迫ってきたのである。天文学関係の翻訳を多く手がけている長崎の大通詞本木

良永に会えたのも大きかった。三年後の寛政四年には『輿地全図』『輿地略説』『地球全図』『地球全図略説』の二組の銅版世界地図を完成させる。続けて二組を出したのは前者の『輿地全図』に不備が多いので、後者でより正確を期そうという狙いがあったからだ。すでにこの時期木版の世界地図は出ていたが、銅版は江漢によるものが始めてであった。

世界地図は海の彼方の未知の世界へ想像をかきたてるとともに、大地の有限性の予感を通して改めて天体や宇宙へ目を見開らかせる。

銅版地図製作の後江漢は地理学としては『和蘭通船』（文化二年）を、天文学では『和蘭天説』（寛政八年）を書くが、地理学よりもむしろ宇宙や天文現象の窮理の方に、彼のユニークな思索は向いていたかと思われる。『和蘭天説』では不十分なながらも諸天体について解説し地動説を紹介するが、天文学の啓蒙書と見なすよりも、つまるところは江漢独自の宇宙論の書で、ここに説かれているのは彼の自然哲学なのである。

この『和蘭天説』に「地ハ其躰水ノ円ナル者ニシテ太陽ヲ囲テ施ルナランカ」、また「地トハ酒水上ノ象ヲ云。其躰全ク水ノコトニシテ、水ノ濁ルモノ土トス」などあり、地球の本質は「水」であると考察する。「水」は「火」と共に江漢の自然哲学では宇宙を形成する二元素で、この二元論はすでに『和蘭天説』に「是天ノ大機ハ、火ハ太陽ノ火ナリ・水ハ衆星月及ビ地ノ二ツノモノ也」というように、かなり早くから江漢の自然観として定着していた。

陰陽五行思想（儒教）、仏教の四大、またヨーロッパにも四元説があり、それらはヨーロッパの近代科学が実測論証する以前に、それぞれ自然観宇宙論の根本をなしていた。江漢がそれらのどれに依ったかは分からないが、少くとも儒教的な自然観からは全く脱していたと思う。陰陽五行が水火二元に縮少されたからというより、彼の思考の型には

陰陽五行の観念性は全くないからである。むしろ前野良沢『管蠡秘言』（安永六年）など西洋の四元説を妥当とする見方を、さらに江漢なりに純化したものではないかと思う。四元とは地水火空でこれはアリストテレス以来のもの、江漢は「西洋ニテハ、金木ヲ捨テ水火土トス」として「空」を抜かしているのが、良沢の『管蠡秘言』ほどに四元思想を明確に意識してはいないかもしれない。

もともと芸術家肌の江漢の著作は、論理構成を密にする著述のスタイルはあまりとらないから、彼の水火二元論の根拠を探すのは難しいところがある。西洋の四元といっても仏教にも四大があり、また海保青陵は火土水の三元説（『洪範談 上』）を説いているから、二元論により近いとして海保青陵からの影響を考える見方もある。

江漢の二元論の特徴は土（地）を消去したことにある。そのところの説明として

土ノ水ヲ剋スト云トモ、土実ニ水ヲ生ジ、水ハ土ヲ戴テ生ヅルに非レバ、能空ニ立コトナラズ、水土ノ相生膠漆ノ如ク離コト不能。  
（『和蘭天説』）

とか、また「地トハ酒水土の象ヲ云。其躰全ク水ノコトニシテ、水ノ濁ルモノ土トス。土ハ水上ノ塵埃（チ）ノコトシ」（同）で、土と水は一体のものと考えていたからである。

地（土）は物質としての土または漠然と大地でもあるが、結局は「地ハ其躰水ノ円ナル者ニシテ」という通り、世界全図や天文学的宇宙観が根底にあるから、地球規模で土を考えれば、地球は土よりもむしろ「水土塊」ということになる。また世界や宇宙へ目を放つとき、広大なものを連環させるのは、土よりも水だとする芸術家的江漢の感情が働いている。

地上では土より水に重きを置いた江漢は、次にこれが火と交わる場として空（氣）を考える。しかしこれを宇宙元素の外に置くのは、宇宙万物の諸現象をすべて動的相において捉えるからである。動的相というのを循環論と云いかえてよいかもしれない。「氣トハ即太陽ノ氣ニシテ、此水土塊ヲ太陽コレ蒸、故ニ水氣升テ雲トナリ、雲聚テ雨トナリ、地ニ復ル」で「火氣能水中ニ入テ相交ル」から「氣ハ火ト水ニシテ一也」と、まあ論理そのものは西洋の四元説で説かれる古典的氣象論の域を出ないかもしれない。だが江漢の自然論はあらゆる現象や事物を、生成交流変転死滅という変化の相のうちに捉えるのが特徴で、「天地皆氣中ノ大機ヲ為」と、氣は水火が出会い万物が変化変転を遂げる場としてまず認識されている。

氣また虚空を重視する宇宙論は東洋的なもので、張横渠（北宋）の氣の宇宙論や、朱子（南宋）の理氣論などが思い浮かぶが、江漢は宇宙の生成を氣で説明することはしない。考え方としてはむしろそれらとは反対の方向をとり、アプリアリに氣の概念を存立させるのを避けている。火と水の循環交流に依る万象の変化は、すべて氣中に現れるのであるから、氣は場であると同時に変化の相そのものと見るからだ。西洋近代科学の初歩的な知識（もちろんその中には随分あやしいものもあるが）による、江漢の格物窮理は氣中に現れる変化の相で説かれるから、氣を元素から消去しても彼の虚空感覚は健在である。例えば彼が情熱をこめて語る氣象学の初歩的知識は、皆空中に出現する現象である。このように理論上では否定しても、江漢のコスモロジーには虚空感覚が充満していて、彼の感性の核をなしているといつてよい。東洋の虚空感覚が、西洋輸入の窮理の論により満たされている姿といえるかもしれない。

六一歳退隱宣言をしてからの江漢は「我名利と云ふ大欲に奔走し、

名を需め利を求め、此二つの者に迷ふ事数十年、今考ふるに、名ある者は躬に少しの謬ちある時は、其あやまちを世人忽に知る者多し。名のなき者誤ると雖も、知る者なし。是名を得たるの後悔、今にして初めて知れり、愚なる事にあらずや。」（『春波樓筆記』）と記し、「今は画も悟りもおらんども細工も窮理話も天文も皆あきはて申候て困入申候」（文化十年六月山領主馬宛諸牘）という心境に陥入っている。しかし西洋の科学知識によつて考察した窮理の論を放擲したわけではない。水火二元論はその自然觀の基底に定着していて、自然に對する彼の視線を確実なものにしているのは、先述した文化八年日金山からの眺望で、天地開闢に思いを致すところによく表れている。おそらく水火二元論による独特の水の感覚、また虚空感覚は、晩年彼がしばしば描いた富士山の絵にもっともよく表現されているはずである。江漢は水と空を描くのに、非常に優れた感覚を持つ画家であったのだ。

ただ晩年になると彼の虚空概念中にいろいろなものが入り込んで来る氣配がある。

『徒然草』を愛読したらしい江漢は、『春波樓筆記』にその抜き書きをいくつか記すが、その一つに

なにがしとかやいひし世捨人の、此世のほたしもたらぬ身に、ただそのなごりのみぞをしきといひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ（二〇段）

を入れてある。虚空（自然とする説もある）憧憬の例として、兼好の感じ方に共感するのだが、この場合の「そら」は彼にとって格物窮理の対象となる空や氣ではなく、老荘的な自然または虚空概念に近いものであるだろう。

神とは何者を云ふか、仏とは何者を云ふか。それ神は日本わが国の祖人の靈を祭れる者なり。靈とは何を云ふか、氣なり。氣とは天地の中間に充てる虚空なり。(同)

で、虚空に神が入り、「夫仏とは釈迦の名づくる者にして、天の大気虚空を云ふ。」と、仏も虚空に帰属する。「虚空を以て一世とす。虚空の天氣地球に徹通して森羅万象を生ず、是を現世とす。生を為す者皆悉く滅し亡びて、天氣に帰す」で、仏教三世の因果論も、彼のコスモロジーに吸引され得るのだ。天文学的宇宙觀を土台に、虚空に生成消滅する水火二元論に依つて人間の生に考えを及ぼせば、そこに一種の虚無思想を生ずることを江漢はよく知っていたと思われる。「天地の虚空より、人間万造皆現れ、亦本の虚無に帰るといふ究理を知り曉す」のが、禪宗の悟りであるが、「寔に異端の教えなれば、常人はかつて学ぶべからず」、壮年の者が学べば廢者となるから、学ぶなら六十歳を過ぎてからにせよなどといいながらも、彼は鎌倉円覚寺誠授禪師のもとに参禅している。当時の仏教界の荒廢墮落などの事情もあり、神道儒仏老莊のうち江漢はとりわけ仏教に敵しまなざしを向けているが、しかし『春波樓筆記』では三教のうちでは、佛教についていちばん多くの言葉を費やしており、「老莊の如きを樂しむ」(文化十年引札)とい

いながら、老莊について触れる部分ごく僅かである。

現実の僧侶の無氣力退廢ぶりは別にして、江漢の仏教へのかかわりには二面があり、一つは「仏書は一向につまらぬ事のみ多し」で、仏書中の譬喩寓話が西洋科学の合理性を知る江漢には、あまりにも荒唐無稽非合理で「愚といふべし」としか云いようがなかったことである。阿含經、俱舍論、法華經などいち応眼は通してみても、やはり「奇怪な」というのが実感であった。にもかかわらず彼が仏教に無関心でいられなかったのは、仏教の空(無)の思想が彼の天文学的宇宙觀と、

何処かで共鳴するところがあったからで、因果律による三世流転も、仏教的因果には同調できなくとも、水火二元の生成消滅循環論は、結局虚空より生じて虚空へ還る仏教の空の思想と響き合うからである。しかし天文学的宇宙觀に仏教的時空論を重ね合わせれば、人生がおそろしく孤独の相に見えてくるのはどうしようもない。

三世因果經曰、天上天下唯我独尊三界皆苦我等安之。是は釈迦の遺言にして、人の能く知る処なり。予此語を解して云、天地は無始にして開け、其中無始にして人を生じ、是より先、無終の年数に人を生ずる事、無量なり。其中我と云ふ者は、予一人なり。親子兄弟ありと雖も、皆別物なり。然れば予能く吾に教えて迷はざる時は、生涯我を安んず。迷ふ時は、三界皆苦しみとなりて、我を亡す。

と、この深い孤独感近代人のそれとは異なる。彼をそこまで追い込んだ要因は彼一人が背負わねばならぬ文脈になっているからである。

江漢が晩年に老莊思想に帰着したと評されるのは、無言道人と名のり、「老莊の如きを樂しむ」などと書いたことが大きい。晩年の韜晦行為そのものが老莊的であつて、まさに「樂しむ」の言葉通り、逍遙遊、つまり世俗的なものいっさいを捨てて、自由無碍な生活を選択したこと、そのような生き方そのものが、老莊的であつたということである。

『春波樓筆記』には具体的に老莊に触れる部分は僅かであるが、生き方として選択体現すれば、そこから発せられる言葉には自ずから老莊的言辭も含まれるという意味では、名利を捨てた自由な境地から発せられる人間論には、やはり老莊的響きがあることを認めないわけには

いかないだろう。

感心させられるは「(莊子は)人間を菌にたとへり、ぼうふりと云ふ虫にたとへ、また世の賢者をかっぱに見たて、色々と浮世の人を、皆愚物なりと笑ひたり」と莊子の一面にある人間卑小觀に割り切れない思いを語ることである。

天の広大よりして、大地を見れば、一粟の如し。人は其の一粟の中に生じて、微塵よりも小なり。汝も我も其みぢんの一毫ならずや。予爰を知ると雖も、之を信せず

と老莊思想にとりつかれる人間が、必ずといってよいほど陥る人間卑少觀から、江漢は自由であつた。広大な宇宙から見れば人間の地位や身分人種の差などは問題にならない微少なものだとして、人間平等論へ向かうところ、これが晩年の江漢の思想の何よりも好ましいところといえる。

注 (1)「江漢書牘」(黒田源次『司馬江漢』)

(2)同右

(3)同種の款はまだ他には四五例認められる。

(4)細野正信『司馬江漢』(読売選書)の「亜鷗堂田善の出現」

(5)同右「日本銅版画創製」

菅野 陽『江戸の銅版画』(新潮社)

(6)『鉄腕腕港漫録(一 盲蛇附和蘭鏡序跋)』(早稲田大学図書館月報十九)

(7)『和蘭天説』にはそのことを記している。「西域ノ諸国、天文・性理ノ精巧ニシテ能通曉シ、一切異端ニ不<sub>レ</sub>従、五倫ノ道ヲ以

四時万国ニ相通シ、天下不<sub>レ</sub>到ノ国鮮シ。故に商舶ヲ通ズルニ、天地ノ術ヲ以テ本トス。」

(8)黒田源次著前掲書

(9)同右「江漢書牘」